

睡眠時無呼吸

D会場(9:20~9:50)

座長 中野 博(国立療養所南福岡病院)

D01. 歯科装具装着により慢性咳嗽の著明な改善をみた閉塞性睡眠時無呼吸症候群の1例

大分医科大学保健管理センター

水城まさみ

同歯科口腔外科

水城春美

背景 閉塞性睡眠時無呼吸症候群(OSAS)は中高年層で増加しており、高血圧や心疾患を合併する頻度が高く無呼吸の治療によりこれらの合併症も速やかに改善する例がみられるが、慢性咳嗽の併発は一般的ではない。今回高度の咳嗽を主訴とするOSAS患者に歯科装具を装着させたところ、無呼吸の改善に伴い咳嗽の著明な改善をみたので報告する。

症例 42歳女性。身長164cm、体重82kg、BMI 30.5。99年2月頃より夜間に咳嗽が頻繁にできるようになり次第に日夜を問わずできるようになった。また夜間の頻回の覚醒と日中の眠気が著明となり、家人にもいびきと無呼吸の増悪を指摘されたため本年2月本学内科外来を受診。簡易睡眠モニターにて無呼吸指数(AI)82回/時と高度のSASを認めた。中咽頭の狭小化と小顎症を認めたため、歯科装具を第一選択としたところ、一日目より熟睡感が得られ、三日目より咳嗽と日中の眠気がほぼ消失し、酸素飽和度の正常化とAI(9.5回/時)の著明な改善がみられた。

考察 本症例において無呼吸の改善のみならず、咳嗽の改善が得られたが、その機序の一つとして無呼吸後の呼吸の再開に伴う唾液の誤嚥が改善した可能性が考えられた。

D02. 睡眠呼吸センターでのポリソムノグラフ116症例の臨床的検討

福岡大学呼吸器科

荒牧竜太郎、豊島秀夫、松永理香、

西田富昭、石橋正義、渡辺憲太郎、

吉田 稔

福岡浦添クリニック 山口祐司

目的 睡眠時無呼吸症候群は成人男性の約3%に認められるとされているが、疾患の存在に気付かれずに放置されていることが多い。そこでポリソムノグラフを施行された症例の臨床像を検討した。

対象 福岡浦添クリニックにおいてポリソムノグラフを施行された116症例(男性95例、女性21例、年齢 51.1 ± 14.1 才)である。

結果 安静時の動脈血ガスでは PaO_2 は 83.8 ± 13.4 mmHg、 PaCO_2 は 44.6 ± 4.6 mmHgでapnea hypopnea indexは 33.0 ± 32.6 (/時間)であった。診断では閉塞性睡眠時無呼吸症候群が83例と最も多く、重症49例、中等症23例、軽症11例であった。その内、nasal CPAPは重症27例、中等症5例に適應され、歯科装具の適應は重症1例、中等症8例、軽症中6例であった。中枢性と混合性無呼吸症候群は各一例で、睡眠時無呼吸症候群以外では単純性いびきが11例で最も多かった。

結論 全症例中、約70%が閉塞性無呼吸症候群と診断され、その半数以上でnasal CPAPまたは歯科装具の適應があり、ポリソムノグラフによる精査が必要であることが示唆された。

D03. 睡眠時無呼吸症候群、周期性四肢運動異常症、及び Restless legs syndrome の関係の検討

睡眠呼吸センター福岡浦添クリニック

山口祐司、名嘉村 博

目的 周期性四肢運動異常症(PLMS)及び Restless legs syndrome(RLS)は不眠を主症状とした疾患であり、睡眠時無呼吸症候群(SAS)との密接な関連が報告されている。今回、SASとPLMS及びRLSの関連を明らかにする目的で、福岡睡眠呼吸センターにおけるSAS、PLMS、及びRLSの関係を検討した。

方法 2000年1月(開院)~3月に施行した睡眠ポリグラフ検査(PSG)症例173例(CPAPのtitration症例は除く)を対象にした。

結果 (1)無呼吸・低換気指数(AHI)>5は73%(127例)、PLM index >5は16%(28例)であった。(2)AHI>5かつPLM index >5は9.8%(17例)であった。(3) pure PLMS (AHI < 5, PLM index > 5) 症例は 6.4% (11 例)であった。(4) PLMS と RLS の比較では、PLMS は男性21人、女性7人で平均年齢 54.7 + 12.8。一方、RLS は男性2人、女性6人で平均年齢は 66.9 + 16.5であった。

結論 睡眠呼吸障害患者の診療においては、無呼吸だけでなく、PLMS や RLS 合併の診断が重要であると考えられる。また、RLS は PLMS に比して高齢の女性に多い傾向が示唆された。